この一ふしとす。

結句、家集に、氷りつゝとある、初句の、年をへてとあるにも打合ひ、力もありげに聞ゆ。

（五六四）

つらゆき

わが戀は知らぬ山路にあらなくにまどふ心ぞわびしかりける

（釋）一首の意は、自分の戀は、案内知らぬ山路ではありもせぬのに、このやうに、蹈迷ふ心はサ、實に難儀であつたワイとなり。

（評）惑ふの語より聯想したる、不知案内の山路を、わが戀に對比ゑたり。想は、今、一段の透徹を要す。

三句、家集に、あらねども、下句、六帖に、などか心のまどひけぬべきとあり。風調體格の上より論ずれば、三句本文の儘ならば、六帖の下句よかるべく、下句本文の儘ならば、三句は家集に從はむぞ、然るべき。

○

くれなゐのふり出つゝ泣く涙には袂のみこそ色まさりけれ

（釋）○くれなゐのふり出つゝなく　夏部「思出づるときはの山の時鳥云々の條に釋けり。但、くれなゐのは、この歌にては、序詞にあらず。末に、色もて承けたり。

一首の意は、戀の思に迫つて、紅を染むるに振出し〳〵するやうに、聲を振絞り〳〵して泣く、赤い涙には、袂ばかりがサ、色が增つたワイ、紅の、着物一面に染むるとは異つてサとあり。

（評）かく、言外に、餘意を遺したれば、こその辭、重き格に聞做すべし。其の袂のみ、色の變るは、もはら、涙を抑ふるが故なり。さて、紅涙は、甚しく泣く時は、涙の竭きて、血の出づる由にて、

和乃抱二其璞一、而哭二於楚山之下一、三日三夜、泣盡而繼レ之以レ血、（韓非子）

楊貴妃、初承二恩召一、與二父母一相別泣、涕登レ車、時天寒、涙結成二紅氷一、（天寶遺事）

など見えたる、漢土の典故あり。かくて、泣くことを誇張しては、血に泣く、血の涙を流すなど、云ひ慣へり。

○

白玉と見えしなみだも年ふればからくれなゐに移ろひにけり

（釋）一首の意は、始の程は、白い玉のやうに見えし涙も、段々に年を經ては、血の涙になつたかして、眞赤に色が變つたワイとなり。

（評）水精の玉が、珊瑚珠と化れりと、涙の上にのみ就きて、其の變化を述べたるに、おのづから、年月に添へて、いよ〳〵、物思の增りぬる趣含まれたり。婉曲といふべし。かくて、他の千言萬語に優る。血涙のことは、上に云へり。

（五六五）

結句、家集に、おりぬべらなりとあり。

（五六六）

夏虫をなにかいひけむ心からわれもおもひにもえぬべらなり　みつね

（釋）○なにかいひけむ　愚なるものと何かいひけむの意。かは反動の辞。○おもひ　思に火をかけたり。

一首の意は、これまで、夏虫を、火の中に飛入つて、心から躬を燃す愚なる物と、何として云うたであらうぞ、さうは云ふべきで無かつたワイ、今は、心から、自分もその通りに、思の火に、身が燃えて云まひさうな樣子であるワイとあり。

（評）燭蛾の典故は、戀一、詠人云らず、

夏虫の身をいたづらになすことも一つおもひによりてなりけり

の條に擧げたり。想も類似云たる上に、本據といひ、おもひの弄語といひ、全く、同一あり。只、叙述に、多少の曲折あるありて、姿致を殊にせるのみ。躬恒にして、かゝる蹈襲を敢てすること、聊、怪むべしと思ひしが、作者の同人友則も、上に、「宵の間もはかなく見ゆる夏虫に云々と、詠みたれば、この頃の人の、好みて、詠みあへる事柄なりけらし。

たゞみね

風ふけば峰にわかるゝあら雲のたえてつれなき君がこゝろか

（釋）○風ふけば云々　峰に棚引ける雲の、風に隨ひて東西に別れて、ちぎれ〳〵になるを云へり。○たえて　俗の一向にの意。白雲の絶えてとかゝれり。○心か　かは歎辞。

一首の意は、風が吹けば、山の頂上を離れて行く雲が、絶えて見ゆるが、そのやうに、たえて（一向に）氣強い、貴方の御心であることよとあり。

（評）三句までは序なり。序の風致も面白く、句々、力量ありて、弓の絃を張れるが如し。この作者の作としては、蓋し、逸調に數ふべきものゝ一ならむ。

結句、六帖、貫之集に、人の心かとあり。これ優りぬべし。下句、新撰萬葉に、往返りても逢はむとぞ思ふとあるは、こと歌にや。

○

月影にわが身をかふる物ならばつれなき人もあはれとや見む

（釋）○あはれ　可怜の意。

一首の意は、あの空の月影に、自分の身を代へらるゝ物ならば、早速代りたい、さすれば、いかに氣強いかの人も、あゝ可愛やと思うて、見て呉るゝでもあらうかとなり。

（評）月影の身に云みゝ〳〵と、人を戀ひつゝ詠みけるならし。「今夜月明人盡望」といひけむ如く、月ばかり、世に愛づらるゝ物も無ければ、この月に、身を相換へなばと思ひ寄るも、無理ならぬ

（五六七）

事にて、絶望の餘り、到底不可能の希望を描きては、さて、その儘ならぬを嘶つ。煩悶の狀態想ひ見るべし。この空想、この實感、兩々相對して、詩味湧然として、こゝに、生ずるを覺ゆ。又、この歌にては、月影は、月といふも同じ程の事なり。月あれば、影は必ずある物故に、打任せては、月とも、月影とも云へり。新後拾遺集に、天暦の御製、

月影に身をやかへましあはれてふ人の心に入りて見るべく

比較して、その巧拙を知るを要す。

拾遺集に再出したるには、四句、思はぬ人もとあり。家集も同じ。六帖には、相思はぬといふ題に入りて、初二句、月影をわが身にかふるとあり。去かも、作者を躬恒と署したり。歌のさまを思ふに、或は然らむ。

（五六八）

戀死なばたが名は立たじ世の中の常なき物こいひはあすとも

ふかやぶ

（釋）一首の意は、もし、私が、この儘戀死なうならば、誰れも外の人の名は立ちはすまいワイ、貴方は、人の死ぬのは、世の中の無常の物として、當然の事のやうに、云ひはなされても、貴方のつれない事は、人もよく知り居る事ゆゑ、やはり、貴方の無情なといふ御名が、立つであらうワイとなり。

（評）されば、餘り、强顏くなさらぬが、貴方のお爲ならむと、所謂、お爲ごかしにして、わが欲望を愜へむと計る、手段の狡猾、語言の巧、また、一顧の値あり。但、万葉集十二、

里人も語りつぐがねよしゑやし戀ひても死なむ誰が名ならめや

人目おほみたゞにあはずて蓋しくもわが戀死なば誰が名ならむも

を藍本として、更に佛理を加味したるなり。三句、景樹が、世の中はとあらでは、その意徹らずといへる、なか〳〵に、僻言なり。常なき物は、世の中を云へるにあらず、人の死を指せるものぞ。

津の國の難波のあしのめもはるにおげきわが戀人知るらめや

つらゆき

（釋）○津の國の難波　津の國は攝津の國の古名、難波の津あるより負へる名なり。和名鈔に「攝津國、延暦十三年停レ職爲レ國」とあるも、猶、物には、津の國と書けり。難波は今の大坂の地。○めもはるに目も遙になり。見渡しの遠さをいふ。上より續けて、苦の芽、又、張る、春をいひかけたりとする說は、穿鑿なり。

一首の意は、津の國の難波の浦の芦が、目も遙々と、見渡す限り生え茂つてある如くに、繁く物を思ふこの自分の戀を、先の人が知らうか、いや、これ程にあらうとは、知りはすまいとなり。

（五六九）

(評)下にのみ思ひ包める戀なるべし。長高の體なり。上句は、萬葉集に、「春草の去げきわが戀」お
ど詠めると、同想の序。

○

手ふれで月日へにける白眞弓おきふしよるはいこそ寐られね

(五七〇)

(釋)○月日へにける　この句、下へ續きては、一首の意、如何にすれども、聞取りがたし。諸註、
さまゝに釋き做したれど、牽强にして諾ふべからず。打聽本には、へにけりとありて、切れ
たり。さてなむ聞ゆべき。假令、かゝる準據の証本おくとも、こゝにて、句は斷るべきあり。
思ふに、書寫の誤を傳へ來しならむ。○白眞弓(シラマユミ)　和名鈔に、「檀、木名也、和名万由美(マユミ)、」とあ
り。伊勢貞丈説に、この木、木理細に其の性ねばく去あやかにして、弓材には甚だ宜し。葉も
幹も、大方、玉椿に似たり。皮を剝けば、木の肌細にして、色白し。云々。檀を弓の上材とす
る故に、眞弓の稱を負せたるなるべし。眞は美稱。白眞弓は、檀にて製れる弓を、白木の儘に
て用ゐるをいふと云々。宣長は、木の色白き故に云ふといへり。さて、下のおきふしの序詞に用
ゐたり。弓射るに、古くは、其の鉾を或は起し、或は倒すことありしなめり。古事記、書紀、
萬葉集などに、弓腹振立て、弓弭振起し、弓上振起しの類、數多見えたり。眞淵が、弓射る人の、
起伏する射禮のありしやうに云へるは、覺束なし。○いこそ寐られね　いは寢なり。宿あり。
一首の意は、心のうちにばかり思うて、かの人には、手さへも觸れずに、長い月日を經て來た

ワイ、今はもう、思が嵩じて、白眞弓の起伏しするやうに、夜は起きたり伏したりして、夜の
目もサ、寐られぬワイとなり。
(評)例の轉輾反側の意なり。序詞の白眞弓の緣にて、掛け離れて居ることを、手も觸れでと、轉義
去たり。二句にて切れば、事も無く聞ゆる歌なるを、季吟は、手も觸れず、久しく置きたる弓
は、節起きあどして、癖の出來る如くにといひ、廣蔭は、手も觸れで月日を經たる白木は、强
くて、引寄せて起伏しさすることも心に任せぬ如くにといひて、譬喩の不完全なるをも忘れ、
宣長は、不得要領の解を下し、景樹は解し難しと云へる、皆、その文字はりの誤なるに心づ
かざりし失考あり。
結句、六帖、家集に、物をこそ思へとなり。

○

人去れぬ思のみこそ佗しけれわがなげきをばわれのみぞ知る

(釋)一首の意は、先の人に知られぬ戀の思ばかりはサ、仕方も無う、難儀に思はるゝワイ、自分の
歎きをば、自分ばかりがサ、承知して居る事ぞとなり。
(評)景樹曰く、家集に、結句、きくとあるぞ正しき、歎きは長息なれば、其の聲を聞く由なりとい
へる、よろし。さばれ、のみの語など、無意味に重複して、洗煉の作とも覽えず。
(五七一)

ことにいでていはぬばかりぞみなせ川あたに通ひて戀しき物を

（五七二）

友則

（釋）○ことに　言になり。○みなせ川　攝津の國山崎のあなたに、さる名所もあれど、本來、固有名詞にあらず。何處にまれ、水の無き川といふことにて、或は、砂の下を水は通りて、うはべに水無き川をもいへり。萬葉集に、水無し川と詠める、是れなり。ミナシの轉、ミナセなり。水無瀬と書ける、瀬の字は、あて字と知るべし。さて、あたに通ひてといはむ序に用ゐたり。一首の意は、スレヤ、戀しいと、詞に出して言はぬと云うばかりであるぞよ、丁度、水無瀬川の、うはべは水の無いと見えて、底には水の通ふやうに、自分も、心のうちには、思が動いて、戀しいものをサとなり。

（評）さりとも、彼の人はえ知るまじと、打歎きたる餘意あり。水無瀬川は、萬葉集に、「水無瀬川下ゆわれ痩すなど、先例なきにはあらねど、譬喩、いとも、恰當あり。戀三に、この作者、また、「かくれ沼の下に通ひて戀ひはえぬ」ともと詠めり。好いたる口癖なるべし。四句を、宣長が、心は思ふ人の所へ通ひてと解けるは、一入ほかなり。心のうちに思の動くを、下に通ひてと、川水のうへにていひ果てたるのみ。分寸の差あり。

みつね

君をのみ思ひ寐にねし夢なればわが心から見つるなりけり

（釋）○思ひ寐　思ひながらに寐入るをいふ。

一首の意は、戀しい人の事をばかり、一途に、思ひながらに寐て見たりし夢あれば、逢ふと見たるも、自分の心がらと、見たのであつたワイ、夢のうちには、逢うて呉れたる人の心を、嬉しう思つたがなあとなり。

（評）嬉しかりし夢は、わが心のなしにて、人は依然として、無情ならむには、なか〳〵に、物思の種にて、見ずともの夢なりけりや。かく、反映の意を味ふ時は、また、多少の感哀あるを覺ゆ。

萬葉集十一、

吾がこゝろ心と望み思へばあたら夜のひと夜もおちず夢にし見ゆる

に胚胎して、更に、一段の結構姿致を具へ、流暢の調を成せり。

二句、一本に、思寐にせしとあり。

たゞみね

命にもまさりてをしくある物は見はてぬ夢のさむるなりけり

（釋）一首の意は、二つ無い命にも優つて、惜しう思はるゝ物は、何ぞあらうかと思うて居たが、ソレヤ、戀しい人に逢ふと見る夢の、まだとくと見切らぬうちに、このやうに、覺むるのであつたワイとなり。

（五七三）

(評)高度の情熱は、輕重の分別を失して、命を物の數ならずとするに至る。見果てぬ夢の悔しさ、思遣らる。突梯の狂想、この好個の詩を成す。家集に、「昔物などいひし女のなくなりしかば、あか時方の夢に見果て侍らで、さめ侍りしにかば、」と詞書あるは、心も得ぬ後人の、餘に、不倫のやうに思ひて、書加へたるさかさらなり。

(五七四)

はるみちのつらき

梓弓ひけばもこするわかかたに、よるこそまされ戀のこゝろは

(釋)○梓弓　既出。たゞ、弓といはむに同じ。○もとする　弓の本弭末弭の方をいふ。○よるこそ寄るに夜をかけたり。

一首の意は、弓を挽けば、其の本末が、自分の方へ寄るが、其のよるといふ夜がサ、昼よりも格別に、人を戀しう思ふ心は、增るワイとなり。

(評)上句は序なり。夜の戀まさるは、物に紛るゝことなければなるべし。景樹は、今更さと思知りたるが、尤も切なる限にて、いと哀なりといへり。

結句、六帖に、戀しきことはとあり。この方、的實なる由、古人はいへり。思ふに、語調をいたくなだらかならしめむと欲せし、撰者等の、改めしにやあらむ。

みつね

わが戀はゆくへも知らずはてもなし逢ふを限と思ふばかりそ

(釋)一首の意は、迷ひぬきたる自分の戀は、何處へさして行くといふ行方も知られず、何處までといふ果も無いワイ、たゞ思ふ人に逢ふを行止まりと、思ふばかりであるぞとなり。

(評)一切を放下して、ひたへに、逢ふべく思入りたる熱誠、人を感せしむるものあらむ。上句は、下句の襯染にて、限無き物に限を云へるを、この巧處とす。

○

われのみぞ悲しかりける彦星もあはですぐせる年しなければ

(釋)一首の意は、世の中に、自分ばかりがサ、悲しい身であつたワイ、あの哀なる物の例に引く彦星さへも、一向逢瀬の無い自分とは違うて、年に一年の契はあつて、逢はずに過ぎたる年がサ、無いからとなり。

(評)世に、同じ悲境に沈淪する者ありと思へば、我のみならずと、みづから、心を勵しもし、慰めもしつべきなり。されば、逢はずして日を經る頃は、心細きものゝ、他にもさる人ありぬべしと慰み、漸く、月を重ぬるに及びては、猶、天上に彦星ありと慰み來しを、端なく、年を重ねて、遂に天にも地にも、その偕無きを知りぬる心のうち、げに、如何ならむ。牽牛織女をこの比興とすること、夙く、奈良時代ははじまりて、この頃に盛なり。さて、この逢瀬なきは、人のつれなきにやよりけむ、はた、さる契ある彦星を引証ゑたれば、素より、知れる中に、障る事ありてにやよりけむ、定かならず。いづれにても聞ゆ。

(五七五)

三句、六帖に、たなばたもとあり。

（五七六）

今ははや戀死なましをあひ見むとたのめしことぞ命なりける　ふかやぶ

（釋）○あひ見む　あひは輕き接頭語なり。萬葉集中、皆、相の字を書けり。逢ひの意にはあらず。
○ことぞ　ことは言なり。事にあらず。
一首の意は、もうはや、焦れ死んで去まはうものを、何時ぞや、逢はうと、かの人が約束して、憑みに思はせたりし一言がサ、命となつて、かう生きて居るのであつたワイとなり。

（評）言諾けのよかりし儘に、よもやにかゝりて網引きたる戀なるべし。源氏物語夕顔の卷に、
うつせみの世はうき物と知りにしをまた言の葉にかかる命よ
この類の攝想、なほいと多かり。

たのめつゝあはで年ふるいつはりにとりぬ心を人は知らなむ　みつね

（釋）一首の意は、逢はうと約束して、憑みにさせ〳〵して置いて、逢うても呉れずに年を經る僞に、懲りもせず、やはり、憑みに去て待つて居る、自分の心底を、かの人は、知つて貰ひたいワイとなり。

（評）虚僞と眞實とを對照せしめて、彼の羞耻心を刺衝し、その悔恨の念をして、轉しては、我に同情

を寄すべく希へり。この心長さも、戀なればこそ。哀なり。
この歌、後撰集戀五に再出して、詞書に「久しくいひ渡り侍りけるに、つれなくのみ侍りければ、」なりひらの朝臣とありて、伊勢が返し、
夏虫の去る〳〵まどふ思せばこりぬ悲しと誰れか見ざらむ
といふをも擧げたり。こは、枇杷左大臣藤原仲平公の官位卑き時の歌にて、なかひらの朝臣と、假名に書きたりけむを、ありひらと寫し誤りしものなり。まこと、業平ならむには、伊勢と時代かなはず。伊勢集にも、この贈答入りて、作者仲平なり。仲平は躬恒と同時の人なるに、この集に躬恒の歌とせしこと、異むべし。
再考、この集撰者の頃は、仲平は官位未だ淺き、三十歳ばかりの壯年にして、伊勢の御との關係は、猶、久しき以前よりありしなるべし。對手の伊勢は、歌人の聞えもあり、餘り、拙劣の歌を出ださむも、嫉く、愧かしければ、斯道の名匠たる躬恒に誂へて、詠ませしにやあらむ。さて、贈りしあらむ。仲平の甥ある師輔の、大納言たりし時すら、わざと、貫之の家を訪ひて、魚袋の歌を乞ひけるを思へ。さて、躬恒は、この集の撰者なるから、わが詠みたるまゝに、わが歌として載せたるあらむ。伊勢の御は、また、仲平の贈りける儘に、仲平の自作と思ひて、集にも書留めたりけむを、後撰集の撰者達、頑に伊勢集を信じて、これを誤とし、作者をあらためて、更に、後撰集には收めけるならむ。なほ、後勘を俟つ。

（五七七）

こものり

命やはなにそは露のあだ物を逢ふにしかへばをしからなくに

（五七八）

（釋）○命やは　廣蔭が、命やは惜しきの意に釋きて、初句にて切りたる、從ふべし。○なにそは離別部「かへる山何そはありてあるかひは云々の條に、委しく、註せり。○露のあだ物を　露の如き、空物なるをの意。空は、はかなくて當にならぬをいふ。

一首の意は、大切に人の思ふ命がサ、命かい、何、それは、露同然の、今も知れぬ空物であるものを、思ふ人に逢ふのにサ換ふるならば、この命を去まう事は、一向惜しくは無いのに、うれでも、逢うて呉れぬので、仕方が無いワイとなり。

（評）逢ひだにせば死をも辞せじの意を、逢ふにし換へば云々といひ換へたる、洗煉の語なり。又、凡想ならむには、先づ、其の命の、極めて、貴重なる由を述べて、さて、戀の爲には惜しとせざる趣に、取做すべきを、これは、開口一番、命を物にもあらぬやうに罵倒し去りて、逢ふに換へば、寧ろ、餘程換へ徳なるやうに、意表に出でたり。高潮の情熱に駈られて、冷靜を失る想の矯激なる、辞樣の奇にして穩健なる、實に見るべきの作なり。この種の風調は、全然、業平朝臣集中のもの、延喜の歌人にして、在五の壘を摩し得たるは、只、この作者一人ならむ。

上句は、或は當時の口語の儘をうつせるか。

初二句、六帖に、命かは何そも露のとあり。家集の一本には、また、命やもとあり。伊勢物語に、「思ふにはあのぶることをまけにける逢ふにしかへばさもあらばあれ」とあるは、この下句

と、戀一、「色には出でじと思ひしものを」の上句とを撮合去たるものにて、理り立たず。妄なり。

明治三十七年十一月廿五日印刷
明治三十七年十一月三十日發行

全五冊
三卷 定價金四拾五錢

著者 東京市本郷區弓町一丁目十二番地 金子元臣

發行者 東京市神田區錦町一丁目十番地 三樹一平

印刷者 東京市神田區雉子町三十四番地 綾部喜久二

印刷所 東京市神田區雉子町三十四番地 宮本印刷所

發行所 東京神田錦町一丁目 明治書院
(特電話本局二四三八番)

不許複製

歌學研究者の必携書

金子元臣先生著

●歌がたり

クロース製全一冊　定價金卅五錢　郵税金六錢

本書は歌學に造詣深き著者が、廣く群書を渉獵して、最も有益にして趣味ある古人の詠歌上における苦心、逸話等を捉へ、著者獨特の奇警なる評論を加へ、或は古今の歌壇に上下し、東西の詩界に縱横して、比較論評を試みたるもの、歌學研究者の机上欠くべからざる珍本也。

金子元臣先生　花岡安見先生合著

●古今歌文書綱要

和裝定價金五拾錢　全一冊　郵税金六錢

國文國語の研究に赴くもの日に多きを加ふる今日、いかなる書につき、如何にしてこれを研究すべきかの撰擇に迷ひて、岐路に彷徨するもの少からずと稱せらる。本書は、この要求を充さむが爲に現れたるもの、我が上下三千年間あらゆる歌文書につきて、一々その梗概を叙し、而して、その註釋書のすべてを擧げて、丁寧に、その良否を指定したれば、一度、本書を繙く者は、迷夢頓に覺めて、一目の下、瞭然としてその從ふ處を定むる事を得べし。

金子元臣先生　柴山啓一郎先生合著

●百人一首評釋

洋裝定價金廿五錢　全一冊　郵税金四錢

一々其意義を詳密に解釋したる上、嚴正なる評論を加へしもの、百人一首の註釋書世に多しと雖も、正確にして懇切なる本書の如きは、他に見るべからず。

東京　明治書院　發行

明治三十七年十月一日現在

明治書院出版書目一覽

（東京神田錦町一丁目十番地　特電話本局二四三八番）

國語、漢文教科書

著者及校閲者	書名	冊數	定價	郵税	備考
落合直文	訂正中等國語讀本	一	円十錢原二、九〇〇	十錢原三〇〇	一ヨリ十マデ各金二十六錢附錄國文學史郵税各金三十錢
仝	中等國語讀本	一〇	二、三二〇	二〇〇	一ヨリ四マデ各金二十二錢五ヨリ十マデ各金二十四錢郵税各金四錢
仝	中等國文讀本	一〇	二、一二〇	二〇〇	一ヨリ四マデ各金二十錢五ヨリ十マデ各金二十二錢郵税各金四錢
明治書院編輯部	中學讀本（國語漢文合編）	一〇	三、三二〇	三〇〇	一、二、各金卅錢、三ヨリ六迄各金卅三錢、七ヨリ十迄各金卅五錢、郵税各金六錢
仝	補習科用中等國語讀本	二	一、五四〇	一〇八〇	各卷金廿七錢郵税各金四錢
仝	師範學校國語教科書	五	一、五〇〇	二〇〇	各卷金三十錢郵税各金六錢
江見清風　藤澤黃坡	師範學校講習科用國語讀本	三	一、六九〇	一〇〇	各卷金廿三錢郵税各金四錢

明治書院編輯部	高等女子讀本	八	二、二八〇	一、一五〇	一ヨリ四マデ各金二十七錢五ヨリ八マデ各金三十錢郵税各金四錢
仝	補習科用 高等女子讀本	二	、六〇〇	、〇六〇	各卷金三十錢郵税各金四錢
内海弘蔵	日本實業讀本	三	一、二〇〇	、一〇〇	各卷金四十錢郵税各金六錢
久松義典	實業補習讀本	三	、七五〇	、一〇〇	各卷金廿五錢郵税各金四錢
和田英松 佐藤球	增鏡讀本	二	、四五〇	、〇八〇	
落合直文 池邊義象	大鏡讀本	二	、六〇〇	、一〇〇	上卷金二十五錢 下卷金三十五錢 郵税各金四錢
今泉定介	保元物語讀本	一	、一五〇	、〇四〇	
仝	平治物語讀本	一	、一五〇	、〇四〇	
仝	太平記讀本	一	、三〇〇	、〇四〇	
仝	平家物語讀本	一	、二五〇	、〇四〇	
島山 金子 元臣	神皇正統記讀本	一	、三〇〇	、〇四〇	

關根正直 金子元臣	徒然草讀本	一	、一八〇	、〇四〇	
落合直文	土佐日記讀本	附註 一	、一三〇	、〇四〇	
仝	十六夜日記讀本	仝 一	、一三〇	、〇四〇	
仝	方丈記讀本	仝 一	、一三〇	、〇四〇	
仝	竹取物語讀本	仝 一	、一五〇	、〇四〇	
石川岩吉	十訓著聞讀本	一	、二五〇	、〇四〇	
池邊義象 國分操子	今昔物語讀本	一	、二五〇	、〇四〇	
	○				
横地清次郎	國文法教科書	三	、七〇〇	、一〇〇	一、金二十錢二、金二十二錢三、金二十八錢郵税各四錢
山崎庚午太郎 林德太郎	中學日本文典	三	、五〇〇	、一〇〇	上下各金十五錢、中金廿錢郵税各金四錢
濟水平一郎 三矢重松	普通文法教科書	三	、六九〇	、〇八〇	上下各金二十二錢中卷金廿五錢郵税各金四錢

明治書院編輯部	女子日本文典	三	七九〇	一〇〇	上、金二十五錢中、下、各金二十七錢郵稅各金四錢
屋代熊太郎 杉田勝太郎	近世國語文典	一	一二五〇	〇四〇	
大久保初雄	日本中文典	二	六〇〇	一〇〇	正編金二十五錢、續編金三十五錢、郵稅各金四錢
明治書院編輯部	假名遣教科書	一	一三〇	〇四〇	
落合直文	新編假名遣	一	三〇〇	〇四〇	
落合直文 内海弘藏	國文學史教科書	一	五〇〇	〇六〇	
全 全	中等教科日本文學史	一	六五〇	〇八〇	
	○				
國語漢文研究會	中等漢文教科書	五	一、五〇〇	一五〇	一、金二十六錢二、三、各金三十錢四、五、各金三十二錢郵稅各金四錢
全	中等漢文讀本	一〇	二、四二〇	二〇〇	一、二各金十六錢三、四各金廿二錢五、六各金廿五錢七、八、九、十各金廿八錢郵稅各金四錢
全	補習漢文教科書	一	三五〇	〇四〇	

簡野道明	高等女子漢文讀本	四	一、一〇〇	一〇〇	一、二、各金二十五錢三、四、各金三十錢郵稅各金四
中村幹雄 山島自彊	漢文讀本史記列傳抄	四	九〇〇	一五〇	一、二、各金二十錢三、四、各金二十五錢郵稅各金四
伊藤松雄	清國時文類纂	一	二五〇	〇四〇	
全	同譯筌	一	一八〇	〇二〇	
	○				
堀江秀雄	中學作文教科書	五	一、六五〇	一五〇	一、二、各金三十錢三、四、五、各金三十五錢郵稅各金六
松平靜	女子作文教科書	四	一、一三〇	一五〇	一編金廿五錢二編金廿八錢三編四編金三十錢郵稅各金四
東南家賢	女學校用最新習字帖	四	九四〇	一〇〇	一、二、各金二十二錢三、四、各金二十五錢郵稅各金四
橋詰學一郎	中學書翰文範	一	一八〇	〇四〇	
國語漢文研究會	讀書作文用字訣	一	二八〇	〇四〇	
落合直文 藤井靜子	萩の下露	一	二二〇	〇四〇	

歷史

沼田頼輔	中等日本歷史	二	二、七〇〇	上卷金三十錢 下卷金四十錢 郵稅各金四錢
野村浩一	國史綱要	一	一、六〇〇	一、〇八〇
今泉定介 島野幸次	訂正中學國史	二	二、五〇〇	二、〇八〇 上卷金二十錢 下卷金三十錢 郵稅各金六錢
沼田頼輔	中學東洋史要	一	一、七五〇	一、〇〇〇
小島政吉	女子科用 東洋史要	一	一、五五〇	一、〇八〇
小島政吉	女子用 日本歷史教科書	二	二、九五〇	二、一〇〇 上卷金四十五錢 下卷金五十錢 郵稅各金六錢
北村包直	新撰世界史綱	一	一、五〇〇	一、〇四〇
沼田頼輔	日本農業小史	一	一、七〇〇	一、〇八〇
仝	中學用 東洋史要參考書	一	一、三〇〇	一、〇四〇

參考書

落合直文	大鏡詳解	一	一、六〇〇	一、一五〇
池邊義象	增鏡詳解	一	一、七五〇	一、一五〇
佐藤球 和田英松	水鏡詳解	一	一、二〇〇	一、一〇〇
松江重頼 見本淸風	日本大文典	一	一、七五〇	一、一五〇
落合直文	十訓抄詳解	一	二、〇〇〇	一、一五〇
萩野由之 石橋脩	榮華物語詳解	一四	五、九〇〇	三、〇〇〇 一ヨリ八マデ各金四十錢 九ヨリ十四マデ各金四十五錢 十五、未定 郵稅各金六錢
佐藤球 和田英松	建武年中行事註解 附錄 增註日中行事略解	二	八、五〇〇	一、一〇〇

187
159

和田英松	官職要解	一	一、〇〇〇
松井簡治	庭訓往來諸抄大成	一	一、四〇〇
關根正直	改訂更科日記略解	一	一、三五〇
島野幸次	東關紀行詳解	一	一、三五〇
花岡安見	國語學研究史	一	一、三〇〇
新聲社	青年文叢第三編若葉集	一	一、一五〇
今泉定介	保元平治物語讀本解釋	一	一、一二〇
關根正直 金子元臣	徒然草讀本解釋	一	一、一五〇
國文學雜誌社	國語漢文檢定試驗問題集	一	一、二〇〇
落合直文 森下松衛	中等作文辭典	一	一、六五〇

187
159

187
159